

学 年	教科等	単元(題材)名	日 時
第6学年	社会科	縄文のむらから古墳のくにへ (第4時)	令和7年7月1日(火)

1 本時の目標

人々の生活やむらの様子について調べ、米づくりの広がりによって、むらからくにへと発展したことを理解することができる。

2 指導過程

学習活動及び学習内容（★は評価にかかわるもの）	「自律的に学ぶ」ための手立て
1 本時の学習について話し合う。 ○ 前時の学習の想起 ○ 本時の学習問題 米づくりが始まり、人々の生活やむらの様子はどのように変化したのだろう。 2 本時の学習の見通しをもつ。 ○ 本時の学習問題に対する予想 ・「米を保管する建物が増えた。」 ・「使う道具が変わった。」 ・「人が多くなって、住む場所も変わった。」 ・「米づくりを指導する人が出てきた。」 等 3 農耕の生活や人々の争いの様子について調べ、伝え合う。 ○ 農耕の生活の様子 ・ 米づくりが始まったころの様子（想像図） ・ 吉野ケ里のむらの様子（想像図） ○ 人々の争いの様子 ・ 矢を撃ち込まれた人骨（写真） ・ くにを構成するむらの位置（地図） 4 争いが起きた理由やむらの様子の変化について話し合う。 ○ 争いが起きた理由やむらの様子の変化（例） ・「どのむらも川の近くにあるよ。」（位置） ・「米づくりには、水が必要だからだね。」（土地利用） ・「争いが起きたから、むらの中に柵や堀、逆茂木をつくるようになったんだね。」（工夫） ・「むらに見張りをする人や物見櫓ができたことから、争いが起きていたことが分かるよ。」（役割） ・「争いに負けたむらを従えて、大きなくにへと変わっていったのではないかな。」（発展） 等 5 本時の学習をまとめ、ふりかえる。（★） ○ 本時の学習のまとめ 米づくりが始まり、指導する立場等の役割が生まれた。その後、米や米づくりに適した土地をめぐる争いが起こった。争いに勝ったむらが負けたむらを従え、くにへと発展した。 ○ 本時の学習のふりかえり ・「私の達成度は80%です。理由は、弥生時代までの世の中の様子は分かったけれど、これからも変化していくことがあるのではないかと思ったからです。」等	○ 米づくりが始まったころの想像図を提示し、「縄文時代と違うことは何か。」と問うことで、人々の生活の様子やむらの様子が変わっていることに気づき、本時の学習問題を設定することができるようにする。 ○ 縄文時代の想像図を提示し、「どのような視点で調べたか。」と問うことで、前時までに獲得・蓄積した「工夫」等の「社会的事象の見方・考え方の言葉」を確認し、見通しをもつことができるようにする。 ○ 「調べるために必要な資料は何か。」と問うことで、予想を基に、農耕の生活の様子が分かる想像図や道具の写真等の資料が必要であることに気付くことができるようにする。 ○ 縄文時代・米づくりが始まったころ・吉野ケ里のむらの様子の想像図を比較できるように提示することで、人々に役割が生まれたことや柵や堀がつけられたこと等に気付くことができるようにする。 ○ 子どもの発言を「位置」や「土地利用」等の「社会的事象の見方・考え方の言葉」に換言して示すことで、新たな「社会的事象の見方・考え方の言葉」として獲得することができるようにする。 ○ 「世の中の様子はどのように変わったか。」と問うことで、「位置」や「土地利用」等を関連付けて、くにへと発展したことについて話し合うことができるようにする。 ○ 本時で獲得した「社会的事象の見方・考え方の言葉」を確認することで、「社会的事象の見方・考え方の言葉」を活用して、米づくりが始まり変化したむらの様子についてまとめることができるようにする。 ○ 単元を貫く学習問題に対する解決度やその理由を記述し、仲間と共有する時間を設定することで、「争いが起こった後の生活の様子についても知る必要がある」等の思いをもつことができるようにする。

3 本時の評価規準

想像図や出土品、地図等の資料を基に、農耕の生活が始まったことやむらで争いが起きたことを読み取り、米づくりの広がりによって、むらからくにへと発展していったことを理解している。(知識・技能)【記述分析・発言分析】

4 板書等

7月1日(火) No.23 むらからくにへ④

大昔の人々の生活は、どのようなことがあって、変化していったのだろう。

学習問題 米づくりが始まり、人々のくらしやむらの様子はどのように変化していったのだろう。

縄文時代(約16500年前) 弥生時代(約2300年前) 古野のむらの様子(約2700年前)

予想 育て方の研究、食べ物、保管、道具、他のむらと交流

役割 米づくりを指導する人と米づくりをする人、はいてする人、商売する人、作業する人、田んぼ、ほりや入り口、広くなった、1世のむらと交流

協力 道具、倉庫、高い、動物が食べる物をやる、工夫、かきわし

争い 400年

どうして争いが...? 物をとる、自分のむらにしたい、米などが足りない、川の近く→米づくりの水、土をかり、むらをする

くに 勝、負、まどめ

ふりかえり

5 指導講評

宮崎県教育庁 義務教育課 島崎 博英 指導主事

- 社会科の授業では、資料から読み取ったことを基に分かることを考えることが大切である。そのために、「伝え合う」と「話し合う」の活動の違いを明確にする必要がある。
- 本時では、人々のくらしやむらの様子の変化について予想をさせた意図が明確ではなかった。予想を基に調べさせたり、調べて分かったことを予想と比較させたりするなど、予想を生かすことができるような展開にする必要がある。
- 学習活動の「4」の段階において、短い時間のなかで教師が様々な発問をしていた。しかし、その発問によって、ねらいとする考えから離れてしまったように感じた。本時の目標を達成するために必要な発問を精選する必要がある。
- 学習指導要領に示されている「社会的事象の見方・考え方」は、単元によって整理されている。今年度の研究において、「社会的事象の見方・考え方の言葉」として示すならば、学習指導要領に沿った言葉を示すべきである。しかし、本時の子どもの発言から分かるように、子どもが考える視点は様々ある。学習指導要領で示されている見方・考え方に限定せず、様々な見方・考え方を言葉として示したいのであれば、「社会的事象の見方・考え方の言葉」という名前を変えた方がよい。また、見方・考え方を獲得させることが目的にならないように気を付ける必要がある。
- 本時は、教師と子どものやり取りが多く見られたが、子ども同士が対話する時間が設定されていなかった。自発的なふりかえりは、子ども同士の対話のなかにこそ現われるのではないだろうか。教師は、子ども同士の対話の時間を確保したり、その際にどのような問いを設定するかを考えたりすることが大切である。さらに、対話の様子から、既習事項や自分の考えをふりかえる子どもの姿を見取るための手立てを考える必要がある。

6 考察

【研究内容1：社会的事象について多角的に考えるための手立て】

- 子どもの発言を「役割」や「工夫」等の言葉に換言して視点として示したことで、授業の後半で提示した資料を調べる際に、獲得した視点を意識しながら調べる様子が見られた。このことから、子どもの発言を、視点として整理していくことは有効であったと考える。
- 教師が様々な発問をしたことで、子どもの考えがねらいから離れてしまった。単元全体や本時のねらいに沿った視点を明確にし、発問を精選する必要がある。

【研究内容2：自らふりかえりを行うための手立て】

- 単元をとおして、単元を貫く学習問題に対する解決度やその理由を記述する時間を設定したことで、本時で学習した縄文時代から弥生時代における変化を考えたり、「他の時代にも変化があるのではないかな」等の問いをもったりする姿が見られた。このことから、単元を貫く学習問題に立ち返り、解決度を数値化させることは、自分の学びふりかえらせるために有効であったと考える。
- 本時は、ふりかえりを仲間と共有する時間を確保することができなかった。自分と仲間の考えを比較したり、他者評価を受けたりしていないため、子どもがふりかえることのよさを実感したとは言い難い。学習内容や活動を精選し、仲間と共有する時間を十分に確保する必要がある。また、仲間と共有するなかで、自分の考えを見つめ直す子どもの姿を見取ることも必要だと考える。